



# 再歩

～にぎわい再び～

岡本商店 (代表 <sup>や</sup> <sup>の</sup> <sup>よし</sup> <sup>はる</sup> 矢野好治さん)

行政区: 福 富

未だ寒さの残るテクノ仮設団地で、矢野さん夫婦はいつも元気に仮設店舗で営業をしていました。

二度の被災後、住宅兼店舗はかろうじて建ってはいたものの、シャッターを開くこともできず、営業ができない状態でした。建物が道路側に傾いていたこともあり、長年地元で愛されていた岡本商店は、その後、思わぬ形で解体されることとなりました。

9月にテクノ仮設笑店街7が開設されたのを機に、岡本商店もここで営業を再開しました。10月には小規模事業者持続化補助金を利用し、移動販売用の自動車を購入。震災前に販売して

## 材料から販売方法まで、こだわりの通す

いた「おやつプリン」の名称を、復興のシンボルとして「益城プリン」に変え、移動販売を開始しました。

仮設笑店街の店舗は、オープンした当初、復興支援も手伝って多くの人が来店し、益城プリンを購入するお客も多かったそうです。現在では、一時の勢いは収まりつつも、益城プリンの人気は未だ衰えず、県内だけでなく県外のファンも多いそうです。

それもそのはず。この益城プリンは矢野さんが、さまざまな材料の組み合わせを試行錯誤した結果、やっとたどり着いた渾身の力作なのです。

矢野さんが言うには、「生クリーム

やバナナビーンズを使わず、小国産のジャージー牛乳、九州産の「こゆい」色をした卵黄と砂糖のみを使用しています」とのこと。一見シンプルにも見える材料ですが、こだわりの材料を使用した益城プリンは、滑らかな舌触りと濃厚な卵の風味が心地よく口の中に広がっていきまます。矢野さんのこだわりが生んだ益城プリンは、今や益城町にはなくてはならない存在です。

そんな益城プリンですが、今は、さらなる販売増を考へてはいないとのこと。そこには矢野さんが掲げるモットーがあります。

「私はお店を始めるとき、対面販売

にこだわりました。人と人とのつながりを大事にしたいからです」

実際に『県外へ送ってほしい』『店舗に置かせてくれないか』との声もたくさんありましたが、矢野さんは今でもそのモットーを胸に、お客の顔が見える販売にこだわっています。

そんな矢野さんの悩みは、やはり新たな店舗。現在の仮設店舗ではスペースの関係上、震災前に販売していた食品や酒類の販売を行っていません。

「本当は惣菜も売りたいのだけど…」。

販売の縮小により、売り上げも減少しています。さらにはテクノ仮設団地

内という町中心部から離れた立地条件のため、納品も大変苦労しているそうです。

そんな苦労の絶えない矢野さん夫婦ですが、今でも週1回は必ず、かつて店舗があった福富で移動販売を行っています。そこでかけられる声は、「いつ戻ってくるの』『早く戻ってきてよ』という地元の子どもたちによるものです。

子どもたちが安心して買い物ができる環境づくりを目指した岡本商店は、子どもたちにとっても必要な存在です。『岡本商店なら大丈夫』という保護者の声からも、いかに地元福富において岡本商店の存在が大きかったかをうかがわせませす。

「まだまだ復興には時間がかかる」と言っていた矢野さん夫婦。それでも顔はうつむくことなく、前を向いていました。その前向きな姿勢や復興を後押しするお客さんの言葉から、岡本商店の未来が明るいことは、誰もが疑いようがないはずです。

お客に直接笑顔を届けるため、矢野さん夫婦は今日も車を走らせま

今号から、生活再建を目指して頑張っている商工業者の姿を紹介します。

産業振興課 商工観光係  
☎ 286-3277